

『戎橋筋案内』

今昔散歩

大大阪時代を 行きつ戻りっ。

昭和2年(1927)刊行とされる『戎橋筋案内』。絵地図をたどりながら歩くと、大大阪時代の賑わいがフラッシュバック。さあ、戎橋から南へ向かってスタートです。

案内人●古川武志(大阪市史料調査会)
表紙も含めて大阪府立中之島図書館所蔵

モダン道頓堀のシンボル 丸万ビル

かつて丸万中店と呼ばれた蒲鉾店は、昭和4年(1929)になって近代的なビルに建て替えられました。戎橋から南を望む風景はモダン道頓堀の象徴として、小出権重の描く挿絵にも登場します。後に三笠屋百貨店、太平マートを経て現在に至ります。あの音楽喫茶ナンバー一番もここにありました。



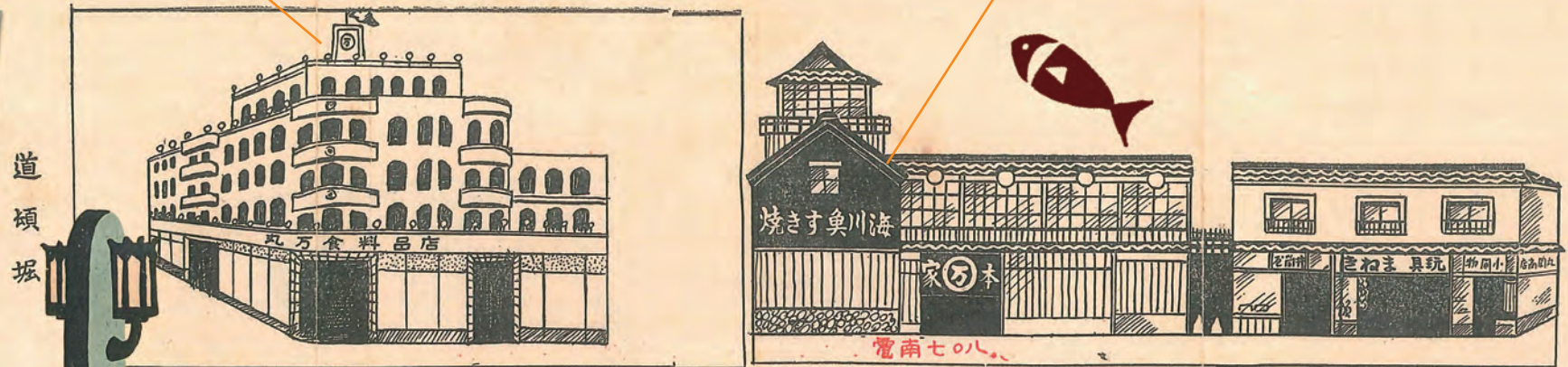
現在のツタヤから東へ望む。右手、丸万ビル

十日戎は魚のすき焼きで一杯 丸万本家

大阪名物、戎橋南詰魚すきの丸万は創業が幕末の元治元年(1864)。初代が瓢箪山のお稻荷さんで占ってもらい、当地に店を構えました。魚すきは魚ちりと違い、魚のすき焼き。山椒の効いた甘辛の出汁は人々に愛され、十日戎の帰りに丸万の魚すきで一杯やるのは、大阪の風物詩となっていました。



丸万名物の魚すき



芝居裏



戦前の店舗

上方落語でお馴染み「へそ饅頭」 橋屋寿永

道頓堀と戎橋筋の南西角にあったのが、菓子商の橋屋寿永。白あんの「へそ饅頭」の名菓「焼巾頭」は、饅頭の上が凹んでいる形状から「へそ饅頭」と称され、上方落語「まんじゅうこわい」にも登場します。

キツネなのにタヌキとはいかに 丸万寿司

丸万寿司の名物は松前寿司とたぬぎすし。松前寿司は鯖の姿寿司に昆布を載せ、竹の皮で包んだもの。たぬぎすしはビッグサイズのいなり寿司。稲荷のキツネとタヌキにしゃれたネーミングです。陶器の入れ物で食す、蒸し寿司(ぬく寿司)も有名でした。



薬局からアートな転身 成見屋



現在のナルミヤ戎橋画廊

ナルミヤ戎橋画廊はかつて薬局でした。九郎右衛門町(戎橋筋から西側)の町年寄であった木村彦右衛門は、明治時代になって薬学博士として薬局を営んでいました。画廊になったのは昭和23年(1948)のこと。



薬局を営んでいたころの成見屋



婦人服、バッグを扱う現在のかわこ。昭和50年代の店頭

女性のファッションコーディネーター 小間物河幸商店

戎橋筋から心齋橋筋にかけて、和装小物や服飾の店が数多くありました。かわこは和装小物専門店として明治3年(1870)に創業。時代の変化に合わせて、洋装へと移っていきました。今も昔もお洒落な女性を演出するお店です。

歌舞伎役者にちなんだ鈴 魁車鈴亀村分店

魁車とは、大正から昭和初期に活躍した名優・初代中村魁車のこと。道頓堀界隈には歌舞伎役者にちなんだ「俳優鈴」を販売していたお店がちらほらありました。我童鈴、延若鈴、鴈田郎鈴、扇雀鈴などがそれ。歌舞伎役者の名前であれば、中村芝翫にちなんだ宝飾店「芝翫香」があります。



人気を博した歌舞伎役者、初代中村魁車(提供:松竹株式会社)

眼科医の眼鏡店 喜多由メガネ店

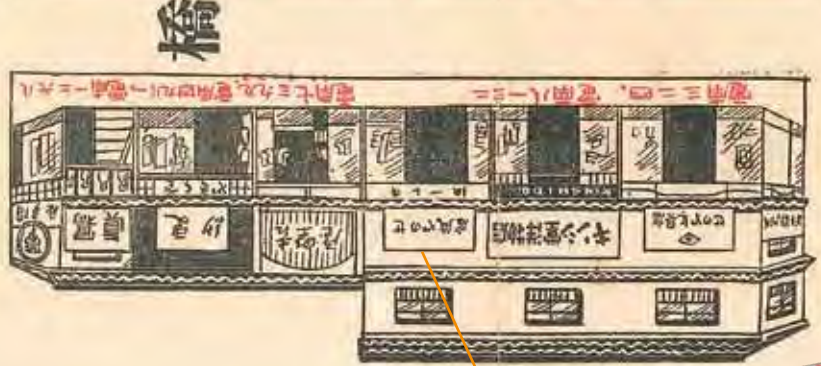
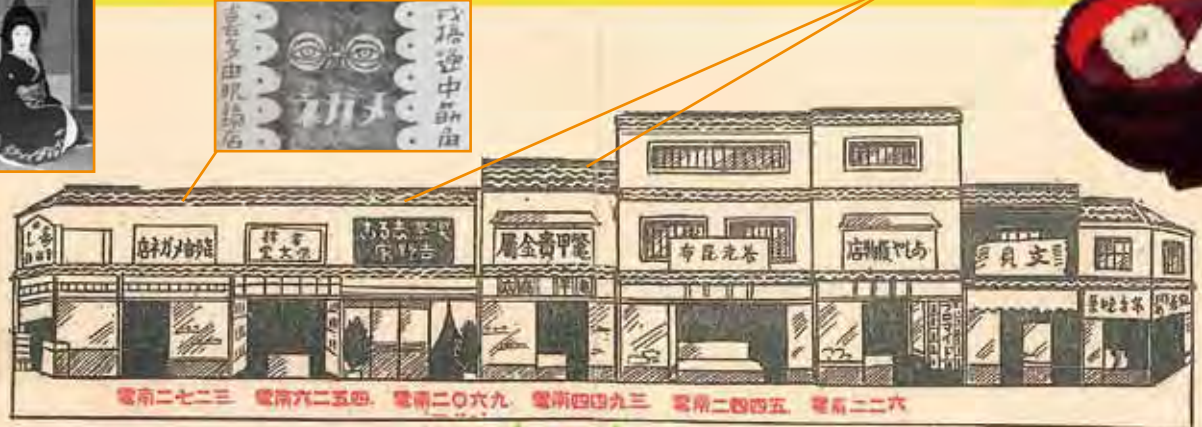
喜多由メガネ店がミナミで開業したのは明治32年(1899)のこと。元々は溝の側の場所であったが、45年(1912)の南の大火により、イラストの場所に移りました。当時は5軒長屋の1軒で、戦後、河幸の南隣に移りました。お洒落な眼鏡が広く出まわる昨今、「検眼医」として眼科医の免許を持ち、眼鏡はあくまで「医療器具」というこだわりのお店は、長く親しまれました。



大正11年(1922)の店舗

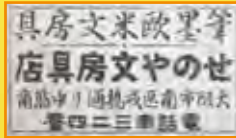
カフェの前身は汁粉屋? 喫茶しろこ吉野屋・ 鼈甲貴金属亀平商店

明治時代、この場所に六兵衛ぜんざいという有名な汁粉屋がありました。現在もカフェやスイーツが集まる戎橋筋商店街には、昔から甘味処が多かったようです。亀平商店も古いお店で、明治時代には鼈甲細工商藤田平助の名前が見られます。



ユニーク土産店の前身? せのや紙店・せのや文具店

「たこ焼きやんでい」「たこ焼きようかん」などのユニークな大阪土産専門店・いちぶり庵は、元は紙商の妹尾商店。歌舞伎の蜘蛛の糸や櫓の梵天飾りなど、芝居町ミナミに欠かせない店でした。ちなみに文具店は、現在、湊町に近い大國橋南詰に場所を移しています。



せのや文具店広告(雑誌「道頓堀」/大阪市立中央図書館所蔵)

巨大レコード会社の直売店 ツバメ印ニッターレコード戎屋蓄音機店

戎屋蓄音機店は、間口11mの上品なニッターレコードの直売店でした。ニッターレコード(日東蓄音器株式会社)は、住吉区にあったレコード会社。創業者は、江戸時代以来の資産家・白山善五郎です。大阪・備後町に本社営業部、東京・銀座と九州・福岡に支店を開設。大正時代には、東京の日本蓄音器商会(ワシ印ニッポノホン、後のコロムビアレコード)と並んで、レコード会社の二大巨頭でした。



レーベルにツバメ印のロゴマークが入ったニッターレコード



昼夜分かたず営業 日本昼夜銀行大阪支店

大正5年(1916)、浅野総一郎によって創設された日本昼夜銀行は、11年(1922)、安田財閥の系列となります。同行のチラシによれば午前8時から午後8時までの営業となっており、まさに「昼夜銀行」でした。コンビニのATMで24時間対応が可能な現代から見て、のどかさを感じます。後に富士銀行を経て、現在はみずほ銀行となっています。

餐付け油商から暖簾分け をぐら昆布

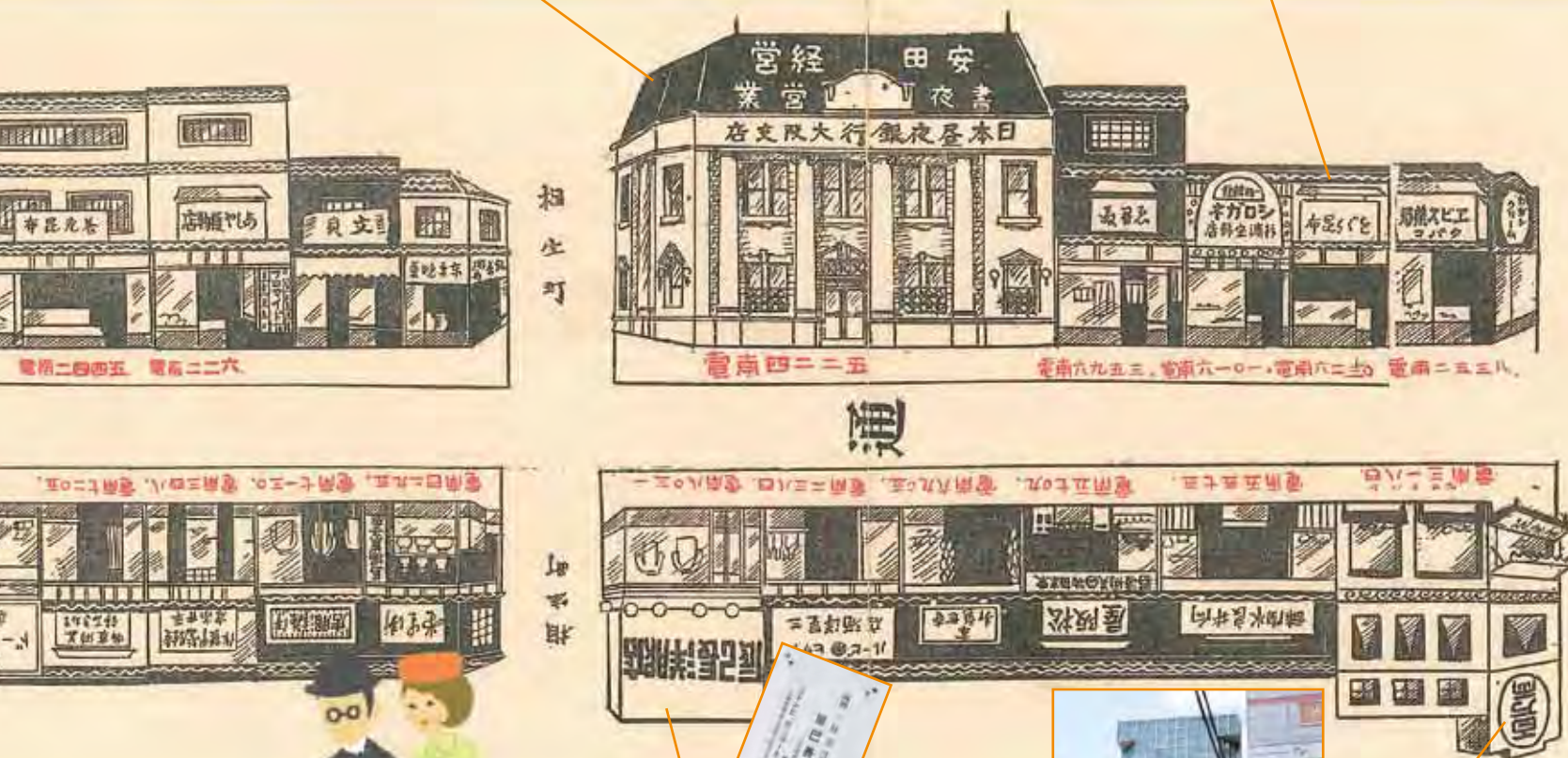
昆布の老舗をぐら屋のチラシを見ると「南地小倉屋 戎橋筋(電車停留所北)」となっています。をぐら屋は元々心齋橋筋にあった餐付け油のお店で、上方落語「三十石夢の通り路」にも登場します。嘉永元年(1848)に暖簾分けによって昆布商となり、明治32年(1899)、戎橋筋に出店。以来、戎橋筋商店街の名物老舗として暖簾を守っています。



昭和28年に新築した当時の店頭



現在の店舗



戎橋停留場

新町



最先端モードはいかが 辰巳長洋服店

まだ洋服が珍しかった大正時代、戎橋筋商店街や心齋橋筋商店街では、モダンな洋服店が人気を集めていました。子供服のヨネツ(心齋橋)や富久屋(戎橋)などはその代表格で、戎橋筋商店街にあった辰巳長洋服店もその一つです。角地に設けられた大きな大きなショーウィンドーは、「ブラ」と呼ばれるウィンドーショッピングを演出し、道行く人々に新しい時代の最先端文化を印象づけたものでした。



辰巳長洋服店広告(雑誌「道頓堀」)



現在のリラ洋服店



現在のアーケード

豪華なネーミングの巨大レストラン 百万両

明治45年(1912)、南の大火の後、都市計画と防災を目的として千日前通(通称、電車道)が設けられました。戎橋筋は南と北に分断されますが、北側の南端に位置していたのが巨大レストラン百万両。創業者は島ノ内管内特殊飲食業組合<昭和3年(1928)結成、後の南観光社交事業組合>の初代組合長を務めた前田為一郎です。ちなみにここは明治時代、入江呉服店があった場所。店主の入江来布は俳人として知られています。



市電が行き交うクロスポイント
戎橋停留場

正式には「戎橋筋停留場」です。南の大火により設けられた千日前通と戎橋筋の交差点、現在の高速道路の箇所、市電の停留場が設けられました。市電の停留場はミナミ界隈では、日本橋、日本橋一丁目、千日前、戎橋筋、難波駅前がありました。馬々崎の大宝堂とカドヤ洋服の間に見えるのは交番です。千日前通建設に伴い、この場所に移転しました。



現在の千日前通に面して、大正から昭和初年にかけてレジャー施設・楽天地があった



現在のアタガール

和の装いの美を伝える
岸田呉服店

戎橋筋商店街屈指の老舗呉服店・岸田屋は、創業が文化8年(1811)と言われます。明治13年(1880)ごろ戎橋筋に店舗を構え、以来、呉服専門店として営業しています。明治時代の資料には、なぜか「岸田唐物店」と記述があります。



かつての店舗



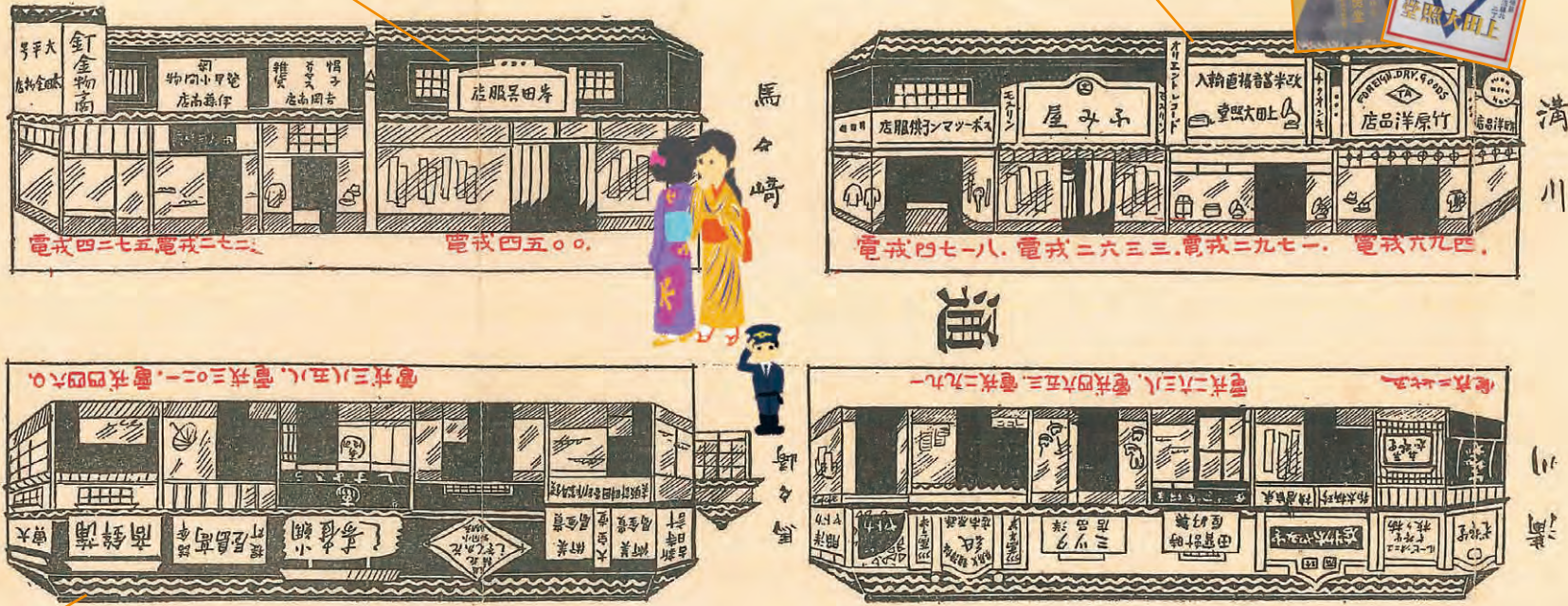
現在のジャガーカバン店

欧米の蓄音器が戎橋を彩る
上田大照堂

戎屋蓄音機店が日東蓄音器の直売店であったのに対して、こちらは「欧米蓄音機直輸入」と書かれています。チラシに描かれている蓄音器は、ラッパ型(朝顔型)に商標がフシ印のニッポノホン(日本蓄音器商会、後のコロムビアレコード)。ニッポノホンはアメリカ・コロムビアの蓄音器を輸入して販売していましたので、このように書かれています。看板にある「オリエントレコード」は、京都にあった東洋蓄音器商会のこと。松井須磨子の「カチューシャの唄」として有名な「復活唱歌」を発売した会社です。当時は日本蓄音器商会の傘下に入っていました。



大正中中に発行された雑誌「道頓堀」に掲載された広告



大阪土産の代表格・蒲鉾
大寅蒲鉾商

千日前通と戎橋筋交差点の南西角にあったのが、蒲鉾の大寅。明治9年(1876)創業の蒲鉾屋「大岩」の婿養子となった小谷寅吉が暖簾分けされるに当たって、大岩の「大」と寅吉の「寅」を取って「大寅」と称し、戎橋筋で開業します。蒲鉾は大阪の土産物として人気を集め、道頓堀のさの半などの名店が数多くありました。大寅は商品券の元祖ともいべき蒲鉾引換券を考案するなど、斬新なアイデアで人気を得てきたのです。



現在の店舗のある場所(P10)へ移転した昭和20年代の店頭



商品券の元祖ともいえる蒲鉾引換券



現在の蓬萊本館



現在のマクドナルド



現在の551蓬萊



現在の大賣



現在のりくろ-おじさんの店



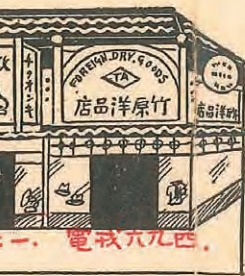
道頓堀にあったカフェムライ(雑誌「道頓堀」)

花開いたカフェ文化 カフェムライ

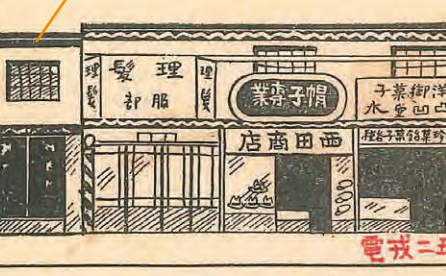
カフェムライは、元々は戎橋筋商店街にあった村井精肉店で、レストランを営業する一方、ウイスキーなど洋酒を専門に輸入販売も行っていました。大正期には営業を拡大し、道頓堀相合橋西詰にもカフェ店をオープンし、赤い灯、青い灯と歌われたミナミのカフェ文化の一翼をになっていきました。また食料品部は後に10銭(ten-sen)でお寿司を販売したことから、天扇館として知られるようになりました。

都会のど真ん中の学びや 精華小学校校門

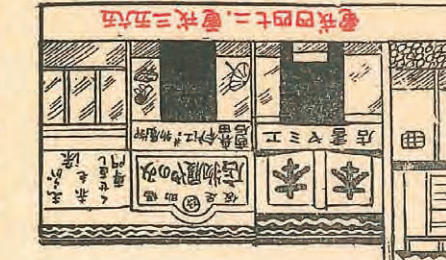
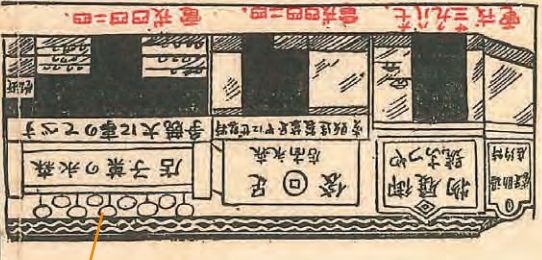
精華小学校は、明治6年(1873)、第2大区第14番阪町小学校として開校しました。33年(1900)、現在の難波新地5番丁に移転し、大阪市立精華小学校となります。今も残る校舎の建設は昭和5年(1930)なので、描かれているのは旧校舍時代の校門。平成7年(1995)に閉校。市立南小学校に統合されました。



溝
川



川
筋



カフェストリートならぬ履物通り おき宗・高見商会

現在の難波センター街「ビック通り」(溝の側)からカフェストリートにいたるエリアには、おき宗・高見商会・森永商店・やっこ号など履物を扱う店が並んでいました。心斎橋筋商店街の履物の名店、おき宗も元は戎橋筋にあったのです。明治時代の『大阪営業案内』では、向かいの「教育玩具ヲキソ」の場所に「履物商 沖野宗助」の名があります。靴店の高見商会は戦後、難波一丁目の戎橋筋沿い東側へ。和服主流の時代、靴はモダンでお洒落だったことでしょう。



高見商会のイラスト(雑誌「道頓堀」)

森永の七変化 森永の菓子店・足袋森永商店

森永製菓とは全く別のお店です。明治時代の『大阪営業案内』には、商店街の東側に「砂糖商 森永幸次郎」の名前が。また西側には氷店として森永支店がありました。

森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓
森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓	森永製菓

『大阪営業案内』より



現在の北極



昭和のレトロ建築

鉄筋には昭和初期の建物も健在。近代からモダンへと、商店建築のデザインが変化した時代を感じることができます。



れんが造りの2代目駅舎 難波駅

南海電鉄難波駅の開業は明治18年(1885)。同社は大阪と堺を結んだ阪堺鉄道として創業した、わが国最初の私鉄でした。ここに描かれているのは2代目の駅舎。21年(1888)に木造の初代駅舎が火災で焼失したため、31年(1898)、れんが造り八角形2階建て駅舎が建設されました。駅前の銅像は創業者の松本重太郎の像。鉄道敷設に際して、衣服のたもとに入れた豆粒を数えて往来の数を勘定したエピソードは有名です。現在の南海ビルは昭和7年(1932)に竣工。地上7階、地下2階のターミナルビルとなっています。



現在の難波駅



大正時代の難波駅



「大阪の夢二」画集の版元 エミヤ書店

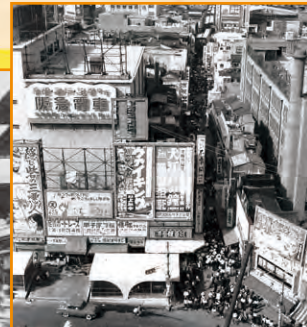
「大阪の夢二」と呼ばれたミナミの画家・宇崎純一は、南海通りの波屋書店の店主です。純一の画集を数多く刊行したのがエミヤ書店で、『スミカズ画集・妹の巻』や『絵画の手本』などを出版しています。店主の実兄は溝の側で十二段屋書房を経営していました。



『スミカズ画集・妹の巻』(明治44年)より
(兵庫県立歴史博物館所蔵・入江コレクション)



芸妓による華やかな踊りが披露された南地演舞場



昭和33年(1958)高島屋屋上から

TOHOシネマズ なんばとマルイの場所は花街の演舞場だった 南地演舞場

明治21年(1888)、豊国神社御旅所跡地に南地五花街(宗右衛門町・九郎右衛門町・芝居裏・難波新地・阪町の5つの遊廓)によって開設されたのが、南地演舞場。現在のTOHOシネマズ なんばとなんばマルイの場所です。こけら落として上演されたのは「芦辺をどり」。「心あらん人に見せばや津の国の浪速あたりの春景色……」と歌われ、京都の都をどりに次いで古い歴史を持つ舞踏でした。30年(1897)には、実業家・稲畑勝太郎によってフランスのリュミエール兄弟のシネマトグラフがここで上映されたのが、本邦映画興行の始まりです。同演舞場はその後、東宝系列の映画館となり、戦後は南街会館へと姿を変えました。

